

九臯会若竹能

水の巻

長寿の滝
救済の川
逆巻く波
うねりの大海
様々に変容せし「水」の世界

第1日 平成29年2月26日(日)

午後1時開演<正午開場>

第2日 平成29年7月23日(日)

午後1時開演<正午開場>

【神楽坂・矢来能楽堂】



永島 充
(ながしまみつる)

1968年生。
(公社)能楽協会 (公社)観世九臯会
三世観世喜之および永島忠修に師事
「美寿々会」主宰
狸々乱 1999年 石橋 2002年
道成寺 2004年 望月 2016年
平成25年6月永島姓を継承
ギリシャ、オランダ等、海外公演にも
参加



奥川 恒治
(おくかわこうじ)

1965年生。
(公社)能楽協会 (公社)観世九臯会
三世観世喜之に師事
「奥川恒治の会」「華友会」主宰
石橋 1993年 狸々乱 1994年
道成寺 1999年 望月 2011年
安宅 2013年
(社)日本能楽会会員 (重要無形文化
財総合指定)
埼玉県蓮田市教育専門推進委員



鈴木 啓吾
(すずきけいご)

1963年生。
(公社)能楽協会 (公社)観世九臯会
三世観世喜之に師事
「一乃会」「観世流一の会」主宰
道成寺 2001年 砵 2013年
安宅 2016年
著書『能のうたー能楽師が読み解く
遊楽の物語ー』(新典社)
日本能楽会会員 (重要無形民俗文化
財総合指定)



中森 健之介
(なかもりけんすけ)

1987年生。
(公社)観世九臯会
三世観世喜之及び観世喜正に師事
千歳 2014年
1989年、2歳で初舞台(仕舞「狸々」)
安宅、望月、烏帽子折の子方を勤める
(公財)鎌倉能舞台評議員

わかたけのう 若竹能とは

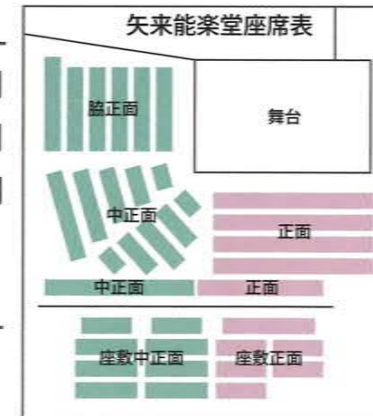
観世九臯会当主・観世喜之門下の毎月行われる若手稽古会より発足し、研究公演として、平成5年より平成20年まで31回の公演を行って参りました。3年間の充電期間を経て、さらなる芸の向上を目指し、平成24年より活動を再開させて頂いております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

九臯会 若竹会一同

◆チケット発売日 平成28年12月2日(金)

若竹能チケット料金

- 正面指定席・・・6000円
- 脇・中正面指定席・・・5000円
- 学生指定席・・・3000円
(要学生証・未就学児童入場不可)



チケット申込

<矢来能楽堂>

- 電話予約 03-3268-7311
- FAX予約 03-5261-2980
- オンラインチケット <http://yarai-nohgakudo.com>
- Eメール yaraieos.ocn.ne.jp

<Confetti> 観劇ポータルサイトオンラインチケットサービス

- WEB予約 <http://confetti-web.com/>



2月公演



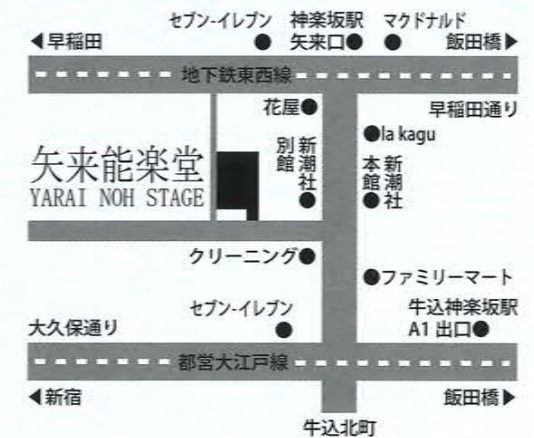
7月公演

- <<WEB予約の注意事項>>
 ・ご予約前に、観劇ポータルサイト「カンフェティ」への会員登録(無料)が必要となります。
 ・セブン-イレブンへの発券手数料がかかります。
 ・ご予約後すぐにセブン-イレブンでチケットが受け取れます。

- 電話予約 カンフェティチケットセンター
0120-240-540 (受付時間 平日 10:00~18:00)

- <<電話予約の注意事項>>
 ・お電話でのご予約の場合、会員登録は不要です。*カンフェティポイントは付きません。
 ・予約有効期間内に、払込票番号をお近くのセブン-イレブンのレジまでお持ち下さい。

<2月・7月セット割引券>
1000円引き
2月26日(日)まで発売
(矢来能楽堂のみ取り扱い)



<矢来能楽堂>

東京都新宿区矢来町60番地
TEL 03-3268-7311

- 東京メトロ東西線「神楽坂」駅
2番出口(矢来口)より徒歩2分
- 都営地下鉄大江戸線「牛込神楽坂」駅
A1出口より徒歩5分
- * 駐車場はございません。
近隣のコイン駐車場をご利用ください。
- * 許可のない撮影、録音は一切禁止です。

◆二月 若竹能

平成29年2月26日(日) 午後1時開演(正午開場)

樵夫 佐久間二郎
老翁 永島 充
山神

能 養老
Yourou
勅使 大日方 寛
里人 高野 和憲

大鼓 亀井 広忠 太鼓 梶谷 英樹
小鼓 古賀 裕己 笛 藤田 貴寛

後見 河井美紀
駒瀬直也

地謡 新井麻衣子 小島 英明
中森健之介 弘田 裕一
坂 真太郎 鈴木 啓吾

休憩20分

仕舞 菊慈童
清 経

駒瀬 直也
観世 喜正

地謡 河井 美紀
桑田 貴志
鈴木 啓吾
中森健之介

仕舞 采女
櫻川 女
鶴川 女

弘田 裕一
観世 喜之
坂 真太郎

地謡 新井麻衣子
小島 英明
遠藤 喜久
桑田 貴志

休憩15分

能 藤戸
Fujito
浦人の母
浦人の亡霊

奥川 恒治
殿田 謙吉
下人 高野 和憲

大鼓 柿原 弘和 笛 熊本俊太郎
小鼓 幸 正昭

後見 鈴木 啓吾
観世 喜正

地謡 河井 美紀 佐久間二郎
中森健之介 中森 貫太
桑田 貴志 遠藤 喜久

終演予定 午後4時40分

◆七月 若竹能

平成29年7月23日(日) 午後1時開演(正午開場)

能 頼政
Yorimasa
老翁
源頼政の霊

鈴木 啓吾
旅僧 館田 善博
里人 善竹大二郎

大鼓 安福 光雄 笛 小野寺竜一
小鼓 曾和 正博

後見 駒瀬 直也
観世 喜正

地謡 桑田 貴志 遠藤 喜久
佐久間二郎 中森 貫太
永島 充 奥川 恒治

休憩20分

仕舞 賀茂
屋島 松風

中森 貫太
小島 英明
観世 喜之

地謡 河井 美紀
駒瀬 直也
弘田 裕一
永島 充

仕舞 玉之段
阿漕

桑田 貴志
遠藤 喜久

地謡 河井 美紀
奥川 恒治
観世 喜正
佐久間二郎

休憩15分

源義経 富坂 唐

静御前
平知盛の怨霊
中森健之介

能 船辨慶
Funabekkei

武蔵坊辨慶 森 常好
船頭 善竹富太郎

大鼓 原岡 一之 太鼓 観世 元伯
小鼓 鳥山 直也 笛 寺井 宏明

後見 中森 貫太
観世 喜之

地謡 河井 美紀 佐久間二郎
桑田 貴志 坂 真太郎
小島 英明 永島 充

終演予定 午後4時40分

「養老」

雄略天皇の御代。美濃国(現・岐阜県)本巢の郡に不思議な泉が湧き出るといふ話を聞いた勅使(ワキ)は、早速にその地を訪れる。するとそこへ、樵の老人(前シテ)と若き男(ツレ)が現れる。勅使が泉のことについて二人に尋ねると、老人はかつて自身の息子が山中にて泉を見つけた、その水を汲んで帰り老人に飲ませたところ、たちまち心も体も若返ったいきさつを語り、その泉にかかる滝水を以後「養老の滝」と呼ぶに至ったと語る。その後、二人は勅使に滝壺の在処を教え、葉の水の徳を讃える。すると天より花降り音楽聞こえ、不思議なる吉兆が現れた。そこで一同が奇瑞の訪れを待っていると、楊柳観音と共に山神(後シテ)が現れ、颯爽たる神の舞を舞うと、泰平の御代を寿ぐ。養老の滝の「孝子伝説」を舞台化した能。通常、神能では前シテが神の化身であることが多いが、この能では奇蹟の水を飲んで長寿となった老人という設定が珍しい。

「藤戸」

藤戸合戦の事は『平家物語』の第十巻に見られる。平家追討の軍を率いる源範頼をはじめ多くの武将たちが海を渡ることが出来ずにいたところを、浦の男に浅瀬の在処を聞き出し、馬で海を渡り先陣の功を立てた佐々木盛綱の武勲。しかし、その裏に隠された悲劇の当事者にとっては、報償に与えられた児島へ悠々と入部する盛綱の姿は、果たしてどのように映ったであろうか。「訴訟あるものは出でよ」と触れる盛綱(ワキ)の前に、一人の年老いた女(前シテ)が涙ながらに訴え出る。「我が子はあなたに殺された。二十数年育てた息子は何よりの希望であった。どうか我が子を返してほしい。さもなくば、いつそ私も同じ身に……。慟哭する女を前に、盛綱はかつての出来事を語る。浦の男しか知りえない浅瀬のからくり。他者への漏洩を恐れた盛綱は、非情にも手にした刀で男の胸を刺し通し、海に押し込め絶命させた。やがて男(後シテ)の魂は浮かばれぬまま悪霊となり、盛綱への恨みを晴らすとするが、思わぬ弔いによって成仏する。権力者に対し力を持たない者が殺害されてしまう理不尽さ。歴史の闇に隠された悲劇の有様を凄烈に描き出した能である。

「頼政」

宇治に立ち寄った旅僧(ワキ)の前に現れた一人の老人(シテ)。周囲の名所を教えると、僧を平等院へと導く。そこはかつて源頼政が陣を構えた場所。扇の形に残された芝は、頼政が自害し果てた名残と聞く。やがて、自身が幽霊であることをほめかし消えゆく老人。僧が夜もすがら弔いの経をあげていると、はたしてかつての武者姿となった頼政の亡霊(後シテ)が現れ、宇治川を挟んでの壮絶な戦物語を語って見せ、さらなる弔いを頼み消えていく。高倉の宮を奉じ、打倒平家の烽火をあげた老武者の心意気。波の逆巻く宇治川を舞台に、源平両家が激突し合う『橋合戦』の有様。『埋木の花』を咲かせることなく散った悲劇の主人公によるその語りは、平家物語の原文を用いてあたかも大いなる戦絵巻が眼前に広がるような、迫力の謡と型によって展開していく。

「船辨慶」

文治元年。鎌倉幕府を開いた源頼朝は弟の義経と不仲になり、やがて義経はその身を迫られる立場となる。そこで二行はひとまず都を離れ、津の国大物の浦へと到着する。武蔵坊弁慶(ワキ)は、これまで義経(子方)を慕って付いてきた静御前(前シテ)を都へ帰すことを考え主君の了承を得る。静は悲しみながらも二行の門出を祝う舞を披露し、やがて慌ただしく出船していく義経たちを涙ながらに見送る。船の用意を告げる船頭(アヒ)を始め、一行は大海原へと船を出す。やがて彼方より湧き出る怪しい雲と風により、浦の波は次第に荒れていく。そして今までに無いような大きな波がやってきたかと思うと、果たして海上にかつての壇ノ浦の戦いで滅んだ平家一門の亡霊たちが平知盛(後シテ)を筆頭に波間に浮かび上がり、義経たちを海に沈めようと襲い掛かる。しかし弁慶の祈りの力により、悪霊は次第に力尽きると、白波の彼方へと消えていく。前場は主君・義経との別れを惜しむ静御前の悲しみ。それが船出の場面で一転して緊張に変わり、その緊張が後シテ・知盛の亡霊を呼び寄せる。一つの舞台上に生者と死者が対峙する、一大スペクタクル。劇的な能を数々つくり上げた、観世小次郎信光の作である。